

【2014年度第1回研究会発表要旨】

地元目線でたどるロミン・ヒッチコックの旅と写真の解読

宇仁義和

ロミン・ヒッチコック Romyn Hitchcock 1851-1923 は明治中頃の1888年に北海道や色丹島を訪れアイヌ民族調査を行った。その報告は写真とともにスミソニアン協会の雑誌に発表さ、『アイヌ人とその文化』(六興出版 1985)として邦訳されている。発表では、国立人類学アーカイブ保存のプリント写真とコーネル大学保存の旅行記などを資料に、オリジナルプリントを投影して判読可能な事象を紹介したほか、ヒッチコックの旅と撮影場所の特定を試みた。【本号「研究ノート」として掲載】

(うに・よしかず/東京農業大学 博物館情報学研究室)

「生命科学者」がアイヌ研究に「色目をつかう」とき

沖野慎二

本研究は、明治から昭和初期にかけて活躍した著名な動物学者・八田三郎(1865-1935)が後年記録映画『白老アイヌの生活』(1925)を監督・撮影するなど、なぜアイヌ研究を始めるに至ったのか、その理由・背景を明らかにすることを目的としている。

日本における「アイヌ研究」の歴史は、明治初期、アメリカの動物学者モースによる大森貝塚発見を契機に勃発した「日本人起源論争」に伴い始まった。明治期において大流行したこの論争や初期のアイヌ研究は現在でいうところの人類学、考古学、民族学の研究者のみならず、前述のモースや渡瀬庄三郎、飯島魁、佐々木忠次郎(以上、動物学)、宮部金吾、白井光太郎、矢田部良吉(以上、植物学)ら多くの著名な「生命科学者」(生物学者)をも巻き込んだ。しかし、大正期に入り論争が急速に下火になってからは、それらの生物学者たちが論争に加わる機会は激減した。

その一方で当時論争やアイヌ研究に全く参加していなかった八田三郎が論争の下火になった大正期、後のアイヌ文化研究に直接つながるような基礎的研究を始めたのは奇妙なことである。この点について当時の八田自身の発言や弟子の犬飼哲夫の後の証言を要約すると、八田がアイヌ研究を始めた理由は「北海道に赴任し、多数のアイヌ資料が保存されている博物館(現在の北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館)に勤めたから」となる。しかし、単にそのような理由ならば、八田の前任者であった原十太や、八田の指導を受け外遊中に館長代理を勤めた田中義麿、同じく八田の指導を受け後任の館長を務めた小熊捍ら博物館に関わった3人の動物学者はなぜアイヌ研究を志さなかったのか。また、八田のアイヌ研究を継承し発展させたのがなぜ田中や小熊ではなく、彼らのさらに後任の犬飼哲夫や名取武光だったのか理由を説明することができない。

なぜ同時代の生物学者の中でただ1人、八田だけがアイヌ研究を始めたのか。換言すれば、八田と八田以外の同時代の生物学者(動物学者)とはいったいどこが違っていたのか。これらの疑問を解明すべく筆者は、当時八田をはじめ多くの動物学者が著した「動物学教

科書」に注目し、その内容を俯瞰、比較しながら、特に八田が著した教科書の中に後にアイヌ研究を志す契機となりうるような記述（要素）が含まれているかどうか調査し、検討を試みた。

さて、本研究で主な調査対象としている八田三郎著『新撰動物学教科書』（開成館、1910）の内容は全体として応用動物学的志向性が強く打ち出されている。最初の「例言」には、「一、動物の自然に於ける状態を確実に認識せしむること。」に続き「二、動物界と生産との関係を確認せしむること。」とある。また、例言 2 ページ目には「第二の主旨に適はんが為め、特に利用厚生を設け、各門・各綱の動物と殖産興業との関係を詳かにし、且つ境遇の影響と動物固有の性とを利用するの法を知らしむ。」とある。さらに 3 ページ目には「また保護鳥令の精神をよく会得せしむる為め、利用厚生に於て其説明を與へ、且つ巻末に主なる保護鳥類の産卵保育の時期と併せて保護鳥の目録を附したり。」ともある。各動物分類群を章ごとに解説するその合間に「第五章 哺乳類・鳥類と利用厚生」、「第八章 爬虫類・両棲類・魚類と利用厚生」、「第十五章 無脊椎動物と利用厚生」、また、「第十七章 動物の死亡・蕃殖及び淘汰性」、「第十八章 自然淘汰 種の起原」と進化論を紹介した上で「第十九章 進化論と利用厚生」とわざわざ別の章を設けて利用厚生を論じている点や、巻末に保護鳥目録を掲載するなど、このような構成の教科書は、筆者が現時点で収集（複写）済みの明治～大正期の動物学教科書 29 点（著者または編者総数 10 名）のうち八田以外の著者による動物学教科書には全く見られないか、仮に記述があっても八田の教科書と同様の明確な構成のものは見あたらなかった。また、八田自身がこの教科書以前に編纂した『動物学新書』（富山房、1892）においても同様に見られなかった。八田だけが『新撰動物学教科書』において利用厚生を強調した背景に明治政府や北海道庁による勸業政策があったかどうかについて現時点では断定できないが、当時の北海道が「開拓政策」のフロンティアであり、勸業政策の言わば「実験場」であったことから否定はできない。

本文 9 ページの「(図) 二」には脊椎動物の顔面（横顔）の比較として、左から右に向かって日本人、アフリカ人、さる、ねこを並べているが、これは進化論の安易な適用例と考えられる。では、八田はこのような進化論の発想からアイヌにも興味を持ったのだろうか。詳細は省くが近代日本における進化論や社会ダーウィニズムの流行、他者認識や人種観の変容に関する研究は近年文化人類学や科学史研究の分野で論じられており、当時の大流行の様子がうかがえる。しかしながら、それらの研究はもとより、八田自身の研究業績からも、八田が進化論とアイヌ研究を結びつけたことを想起させるものは見つかっていない。

筆者は、八田がアイヌ研究を始めた理由・背景に「進化論」があったのではなく、その発想に前述の「保護鳥」が重要キーワードとしてあったのではないかと考えている。動物発生学から始まった八田の研究はその初期から動物と外界（環境）との関係に着目し、後に様々な野生動物に関する動物地理学や動物生態学的研究を行うと同時に、特に後の大正時代には当時絶滅の危険性があったハクチョウを天然記念物として保護することを提言するなど、応用動物学的成果として現代の自然保護につながる先駆的な活動も行っていった。八田が前述の『白老アイヌの生活』を撮影し、講演会で当時のアイヌの生活が急速に変容したことを危惧し、伝統文化の早急な記録・保存の重要性を訴えたのは正にこの時期であ

る。

調査継続中であるため、現段階では断定できないが、八田三郎が「保護鳥（の記録と保護）」「野生動物保護」を重要視し、同時に「(かつて自然環境と密接に暮らし、有効利用していたはずの)アイヌの伝統文化・生活の記録・保存」も重要視したのは彼の発想の中で全く同じことを意味していたと考えられる。ただし、それは彼の勤務地が北海道であったからという理由だけではもちろん説明できない。彼の研究に「進化論」の色彩が薄く、他の多くの動物学者たちと比べて「生態学」および「応用動物学」の志向がより強かったことのほうが「アイヌ研究」に携わる契機とむしろ関係していたのではないかと筆者は推測している。

(おきの・しんじ／東海大学国際文化学部)

環北太平洋におけるニシン歴史生態学 — トリンギットとアイヌを例として —

濱田 信吾

環北太平洋の先住諸民族の沿岸海洋資源といえば、まずサケそして海獣哺乳類が挙げられる。しかしニシンも北米北西海岸の文化史において密接かつ重要な役割を果たしてきた。アラスカ州南東部のトリンギット社会では現代でもニシンは文化的・生態的鍵種として、伝統環境知と実践を通じて非商業（生業）利用が多く行われている。一方、北海道でニシンといえば場所請負制度下で発展したニシン漁、そして明治時代に資本化された漁業の大規模化が浮かぶ。しかし和人中心の北海道史の構築と言説の中で、中近世以前のニシン資源利用について議論がされることは少ない。本発表では、考古学や歴史学、そして民族学など様々な分野からの資料を用いて、環北太平洋におけるニシンの重要性を長期的視点で考察し、その結果を口頭発表した。【本号「論文」として掲載】

(はまだ・しんご／総合地球環境学研究所プロジェクト 研究員・インディアナ大学人類学部 外来研究員)

沼田町の河童

— ひばりヶ丘公園における河童のうわさの予備的調査報告 —

松井 佳祐

はじめに

本発表は、沼田町内にあるひばりヶ丘公園内の池の河童のうわさに関する予備的調査報告である。発表者は第38回日本口承文芸学会大会（2014年6月7-8日、東北大学）において、同町内の別な場所にある弁天宮内池（通称河童池）での河童のうわさについての調査報告を行った。その調査の過程で、本発表で取り上げるひばりヶ丘公園内の池にも河童のうわさがあることが判明した。そこで前半ではまず弁天宮内池での河童のうわさの概要を紹介し、後半でひばりヶ丘公園内の池の河童のうわさに関する現時点での調査結果を報

告する。

弁天宮内池（通称河童池）

北海道のほぼ中央、空知支庁管内北西部に沼田町という小さな町がある（2014年11月末現在の人口は3326人）。沼田町出身の私は、幼少期に友人から「河童池には河童が出る。昔3人の女の子が池の周りで遊んでいたが、そのうちの1人が溺れてしまう。他の2人が助けようとする。池の中を見ると河童が足を引いている。助けようとした女の子2人も河童に突き落とされ溺れ死んでしまう」という話を聞いたことが調査の発端となっている。

このうわさが、他人にはどのように伝わっているか、うわさを知る年代、地域を調査することで、うわさの発生、伝播、消滅の一例を明らかにすることができると考えた。

資料、92人に対するインタビューによる調査の結果、以下のことが明らかとなった。

①弁天宮内池での死亡事故について。池で事故があり、男児3人が亡くなるという事実があった。また、この3人の霊を祀る地藏堂が、大徳寺境内に存在した。しかし、納骨堂の改築に伴い2013年11月末に撤去された。

②弁天宮の由来について。昭和3年8月15日現在地に小祠を建立したのが創始である。その後、平成7年から9年にかけて池、宮内の改修が行われ、池は浅くされ、弁天宮横の空き地も公園として整備され、今にいたる。

③弁天宮内池への認識について。平成7年以前の池を知っており、池を底なし沼と言っていた人は92人中22人おり、弁天宮内池は危険な場所だという認識があった。しかし、工事後の池しか知らない10代になると、池を危険なものとして認識しなくなる人が現れる。

④インタビューから得られたデータを年齢別、住所別、保育園別にまとめて考察した結果。年齢別では、「河童池」という通称と「河童の話」の認知度は、池の変容と事故が起きた過去への認知度に大きく依存することが考えられる。住所別では、「河童池」「河童の話」「事故が起きた事実」に関して、市街に住む人と、市街外に住む人で認知度に大きな差があるとは言いがたい。保育園別では、92人中29人を占める20代に関して注目した。沼田町内の保育園に通っていた人は20人で、沼田保育園の卒園生である15人は全員「河童池」という通称を知っている。また、沼田町内の他の保育園の卒園生も5人中4人が知っている。保育園に通ったと答えていないか、小学生になってから沼田町に転校してきた人は9人である。そのうち通称を知っていると答えた人は9人中3人となった。市街外に住んでいて、通称を知っているのは、全員が沼田保育園の卒園生である。以上のことから、河童のうわさの発端は、沼田町内の保育園、特に沼田保育園にあると考える。

⑤誰から河童の話聞いたかについて。「覚えていない、気が付いたら言っていた」15人「友達」7人「保育園の先生」5人「親」1人である。このことから、調査開始以前に予測していた、親が注意喚起として河童の話をしたことが、うわさの発端となっている可能性は低いと考える。ここで注目したのが、「子どもたちに、危ないから近寄るな」という意味で、河童が出るから近寄るなといったような気がする。底なし沼だから近寄るなみたいなことも言ったような気がする」「子どもたちに、危ないから沼に近寄らないでねって言った。沼に近付くと河童に引きずり込まれるよ的なことをいったかも」「沼が危ないから子どもたちに河童が出るって言った」というように、沼田保育園の保育士が、注意喚起として子どもに河童の話をした例である。

以上のことから、弁天宮内池の河童のうわさの原点は昭和3年の水難事故にあるだろう。

また、50代から40代にかけて、河童池という通称の認知度に転換が見られ、この頃から頻繁に話されるようになった。うわさは沼田保育園内で広まり、伝えられ、弁天宮で遊ぶ市街の子どもの間に広まったのである。それが、保育士によっても園児たちの注意喚起として利用された可能性がある。しかし、平成7年から9年の弁天宮の工事により、危険ではなくなった池で河童のうわさはされなくなり、このうわさは消滅に向かっていると結論付けた。

ひばりヶ丘公園の河童のうわさ

調査対象者は全98人。ひばりヶ丘公園の河童に関して話を聞くことができたのが14人で、その中で河童のうわさを知っていたのは3人である。

A「ひばりヶ丘公園の池で、呪文？何かを言うと河童が出てくる。(池を)ずっと見てたけど何もなかった。河童が出てきて足を引っ張る。」

B「ひばりヶ丘の河童は聞いたことがある。」

C「ひばりヶ丘に河童が出る。」

ひばりヶ丘公園について。明治32年に北竜尋常小学校が同場所に創立され、その後変遷を経て北竜小学校となった。しかし、昭和49年児童数の減少により、市街にある沼田小学校に統合され廃校となる。その跡地が、昭和55年ひばりヶ丘公園として造成され、今にいたる。また、北竜小学校へ通学していた方への聞き取りによると、昭和40年頃の児童数は70人ほどである。加えて、ひばりヶ丘公園の池は昭和40年頃はただの湿地であったが、公園の造成と共に水深が深くされ、沼のようになったということがわかった。

考察

弁天宮とひばりヶ丘公園を取り巻く環境を比較し、ひばりヶ丘公園の河童のうわさについて考察する。

弁天宮の河童のうわさが、広がりを見せている理由として考えられる事は以下の通りである。1つ目は、池で過去に死亡事故が起きており、危険な場所だという共通認識があった。2つ目は、弁天宮は市街にあり、人が頻繁に訪れる場所である。そのため、池に対する注意喚起の意味も込め、河童のうわさが生まれたのである。一方、ひばりヶ丘公園では、北竜小学校が存在していた時代は、池は浅く危険な場所という認識はなかった。また、ひばりヶ丘公園の池で死亡事故が起きたという話も聞かない。北竜小学校が廃校となり、公園として造成される際、池の水深が深くなるも、町外れにあるため、めったに人が訪れる場所ではなくなった。これらのことから、うわさが生まれる背景はないのではないかと考える。

では、なぜひばりヶ丘公園の河童のうわさを知る人が存在するのか。うわさを知るAとBは沼田保育園に通い、BとCは姉妹である。そのため、弁天宮の河童のうわさを聞いた何者かが、比較的ひばりヶ丘公園の近くに住む彼らに、創作した話をした可能性がある。

まとめ

弁天宮とひばりヶ丘公園は、池の危険性の違い。池が危険な場所であるという認識の違い。2つの場所が、町民にとって身近な場所であるか。という点で、状況が異なる。総合すると、ひばりヶ丘公園における河童のうわさが広がる要因は少なく、このうわさは限定的なものであると考えている。

(まつい・けいすけ／札幌学院大学 科目等履修生)